



Title	写真史のなかの横浜
Author(s)	斎藤, 多喜夫
Citation	古写真研究, 第3号, pp.78-80; 2009
Issue Date	2009-05
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10069/23371">http://hdl.handle.net/10069/23371</a>
Right	

This document is downloaded at: 2019-04-26T10:34:21Z

# 写真史のなかの横浜

斎藤多喜夫（横浜都市発展記念館）

## 1. 判明した外国人写真家の足跡

今から26年前の昭和56(1981)年、横浜開港資料館がオープンした年に開催した「下岡蓮杖と横浜写真」という企画展示を担当した時には、日本の写真史の始まりと言えば、「東の下岡蓮杖、西の上野彦馬」というのが常套句だった。外国人写真家、とくに蓮杖以前の写真家の研究はきわめて不十分だった。

昭和61(1986)年には『F.ベアト幕末日本写真集』<sup>1</sup>を刊行し、その解説編で、それまでほとんど知られていなかったソングースとパーカーの存在や、ベアトの日本での足跡を明らかにした。それは日本の写真史研究にそれなりの貢献をするものだったが、蓮杖以前の外国人写真家については依然不明のままだった。(写真1)

その後、ベネット氏によって開港直後に来日したロシエやフリーマンの事跡があきらかにされ<sup>2</sup>、わたしも蓮杖にカメラを譲ったのがジョン・ウィルソンというアメリカ人写真家だったことを立証した<sup>3</sup>。ウィルソンについてはその後ドブソン氏がさらに多くのことを明らかにされている<sup>4</sup>。

今年の7月、読売新聞で外国人写真家についてのベネット氏やドブソン氏の研究成果を紹介し、その末尾で次のように述べた<sup>5</sup>。

「ウィルソンの写真がまとめて発見されれば、日本写真史上の大発見になるだろう。日本の写真史は、ますますホットな研究分野になりつつある。」

ところが、ベネット氏の主宰するオールド・ジャパン社のカタログには、翌8月にもうウィルソンのステレオ写真がたくさん載っていたし<sup>6</sup>、同じ頃、ドブソン氏もベルリンでウィルソンの写真を発見していた。「写真史のなかの横浜」が、今現在いかにホットな研究分野となっているか、おわかりいただけるものと思う。

## 2. イメージ・ハンティングのメディアとしての写真

開港直後に来日した外国人写真家の足跡や作品が明らかになることによって、わたしたちは歴史における写真の意味について、確かな事実に基づいて論ずることができるようになりつつある。

西洋諸国による世界についての知の探求は大航海時代に始まる。最初は探検家や商人や征服者によって、やがて博物学者によって。日本にもオランダ連合東インド会社に雇用されるかたちで、ケンペルやシーボルトなどの博物学者がやってきて、研究を深めた。かれらは研究の一環として、日本人について、日本の植物や動物について、さまざまな画像を収集した。世界を股に掛けて植物を収集する人のこ



写真1 山手より横浜外国人居留地を望む 1862年11月、ソングース撮影。『絵入りロンドン・ニュース』1863年9月12日号に掲載されている横浜全景の木版画の元写真、6枚組パノラマの右2枚分。長崎大学附属図書館所蔵

とをプラント・ハンター<sup>7</sup>と言うのになぞらえて、世界各地で画像の収集に当たる人をイメージ・ハンターと呼ぶことができよう。

19世紀は世界が西洋中心に再編成される時代だった。貿易や国家間の関係は言うに及ばず、世界についての知識も西洋中心に構築されていく。アジアの諸地域は、インドのように植民地となるか、中国や日本のように西洋諸国と条約を結んで港と町を開放することになった。植民地の海港都市や条約締結国の開港場は、物資のみならず、知識や情報のネットワークを構成するようになる。

この過程でイメージ・ハンターの活動はますます活発となり、その成果が絵入り新聞の挿絵となって広く普及した。その先駆けとなった『絵入りロンドン・ニュース』の創刊されたのが1842年、翌年にはパリで『イリュストラシオン』が、ベルリンで『イラストリエルト ツァイトゥング』(Illustrirte Zeitung)が創刊されている。この時期は写真の草創期とほぼ重なる。写真がイメージ・ハンティングの手段となり、絵入り新聞の挿絵の原画となるのにあまり時間はかからなかった。写真によるイメージ・ハンティングを敢行するアドヴェンチャー・フォトグラファーが登場する。

わたしたちは現在、西から東へのイメージ・ハンティングとして、ともにロンドンを発進地とする二つの運動を知っている。一つは政府に発するもの。わたしたちがよく知っているのは、1855年、クリミア戦争の写真取材のためにロバートソンと助手のベアトを従軍写真家に指定したことだ。その後かれらは東地中海各地で撮影旅行を行い、さらにベアト兄弟はインドに、弟のフェリーチェ・ベアトは中国に向かう<sup>8</sup>。かれらはイギリス政府との繋がりを持ち続けていたように思われる。

もう一つは民間に発するもので、ネグレッティ&ザンブ



写真2 イギリス公使館に当てられた東禅寺の山門 1859年6月、ロシエ撮影。長崎大学附属図書館蔵



写真3 アメリカ公使館に当てられた善福寺 1859年6月、ロシエ撮影。公使館には庫裏の建物が使用された。そこから本堂を撮影したものであろう。長崎大学附属図書館蔵

ラ社によるもの。クロード・マリー・フェリエ (Claude-Marie Ferrier) やフランシス・フリス (Francis Frith) によるヨーロッパ各地や東地中海、アフリカにかけての写真の販売が成功したことの延長上に、ロシエを雇用して中国へ派遣することになる<sup>9</sup>。

イギリスで中国に対する関心が高まっていたのは、1858年に第二次アヘン戦争が勃発したからである。官民二つのイメージ・ハンティングの運動は中国で交差する。ベアトが『絵入りロンドン・ニュース』と特派員契約を結んでいた画家ワグマンとともに、北京に向けて進軍するイギリス軍に従軍したのに対して、ロシエは江戸に公使館を開設するために日本に向かう総領事オールコックと行動をとる。ロシエではなく、ベアトが中国でイギリス軍の従軍カメラマンに指定されたことから、結果的にロシエが日本への一番乗りを果たすことになった。(写真2, 3)

東から西に向かったのイメージ・ハンティングの運動もあった。カリフォルニアでのゴールドラッシュと北太平洋での捕鯨の盛況が、アメリカの政府や人々の目を西に向けさせた。捕鯨船の補給基地として日本の持つ重要性が認識されるようになる。日本のイメージ・ハンティングにあたって、アメリカで『絵入りロンドン・ニュース』に相当する役割を果たした絵入り新聞に『イラストレーテッド・ニュース』がある。1853年1月22日号には、1850年の冬遭難した栄力丸の乗組員が、H.R. マークス (Harvey R. Marks)

によって撮影された写真をもととする挿絵が掲載されている。東からの写真によるイメージ・ハンティングの運動が、一足先に日本人をキャッチしたのだった。

その延長上に、ペリー提督の率いるアメリカの日本遠征隊による、条約締結交渉と平行した博物学的研究とイメージ・ハンティングがあったことは言うまでもない。ハイネがスケッチによって、エリファレット・ブラウン・ジュニアが写真によってそれに従事したこともよく知られている。写真による日本のイメージ・ハンティングの先鞭をつけたアメリカだったが、1861年に始まる南北戦争のため一旦頓挫する。

そのことは、アメリカ人ジョン・ウィルソンが、アメリカの公使館や領事館との結びつきではなく、プロイセンの使節団に雇用されて撮影活動を行ったことに象徴的に示されている。その事実のうちに、東からと西からの運動の交錯を見てとることができるが、あるいは東からの運動が西からの運動に絡め取られたと言ってもよいかもしれない。東からと西からの写真によるイメージ・ハンティングが交錯する場として、「写真史のなかの横浜」は、いままさに興味の尽きない研究対象となっている。

### 3. 日本人写真家の誕生

このセッションのテーマは「写真術の伝来と外国人写真家」なので、日本人写真家のことに詳しくは触れない。概略のみ述べると、1860(万延元)年にアメリカ人フリーマンが横浜で写真館を開いたこと、翌年には鶴飼玉川がそれを継承して江戸で写真館を開いたこと、1862年(文久2年)初頭にはアメリカ商人ショイヤーの商館内にあったウィルソンのスタジオを継承して下岡蓮杖が営業を開始したがうまくいかず、有名な苦勞談の時期を経て、同年末頃改めて開業したことなどが新たに判明した<sup>10</sup>。石黒敬章氏の提唱する下岡蓮杖写真鑑定術によって、風景写真の発見が少ないのは残念だが、蓮杖の作品が続々発見されているのも近年の際立った動きの一つである<sup>11</sup>。

肖像写真はしばらく置き、風景・風俗写真について言えば、日本人写真家のそれは、西洋人によるイメージ・ハンティングに対して、日本の側から呼応しているように見える。昔から外国人に媚びた撮影態度だと言われてきた。それも事実の一面だが、西洋人と日本人では、どうしても関心や感性に違いがあるはずだ。同じように見えても、ちょうどステレオ写真の2枚の写真のように、微妙なずれがあるにちがいない。西洋人によるイメージ・ハンティングに呼応しながらも、そこには日本人の自己認識の契機も含まれているのではないか。

西洋人の日本イメージと日本人の自己イメージを重ねあわせることによって、あたかもステレオ・ビューアーでステレオ写真を覗くように、より立体的な日本のイメージが見えてくるのではないか。明治時代の日本人が、外来の文化と在来の文化を巧みに組み合わせて、単なる物まねではない、和洋混交の独特の文化を生み出したように、西洋人の日本イメージを一面的なものとして否定するだけでなく、それを日本人の目で捉えなおし、西洋人にとっても日

本人にとっても真実であるような日本像を生み出すことができないだろうか。明治時代に全盛期を迎える「横浜写真」について、そのような目で改めて研究しようと思っている。

## Notes

- 1 横浜開港資料館編・刊。『F.ベアト写真集1—幕末日本の風景と人びと—』（横浜開港資料館編、明石書店刊、2006）として復刊。
- 2 Terry Bennett, *Photography in Japan 1853-1912*, Tokyo/Singapore, Tuttle Publishing, 2006
- 3 斎藤多喜夫「幕末、明治初期に来日した外国人写真家たち—解けた“ウンシン”の謎—」『日本写真芸術学会誌』平成7年度4巻2号（1996年4月）所収。
- 4 「ジョン・ウィルソン—新たな資料から解明された彼と仲間の写真家たち」『日本写真芸術学会誌』平成19年度16巻1号（2007年6月）所収。
- 5 「開港場物語31 外国人写真家」『読売新聞』（2007年7月1日）掲載。
- 6 *Old Japan Old & Rare Photographs Catalogue* 34, 2007.8
- 7 白幡洋三郎『プラントハンター—ヨーロッパの植物熱と日本—』（講談社選書メチエ6、1994年）
- 8 斎藤多喜夫「横浜写真小史再論」『F.ベアト写真集2—外国人カメラマンが撮った幕末日本—』（横浜開港資料館編、明石書店刊、2006年）所収。
- 9 P.A.Negretti, 'Henry Negretti - Gentleman and Photographic Pioneer', *The Photographic Collector*, Vol.5 No.1
- 10 斎藤多喜夫『幕末明治 横浜写真館物語』（吉川弘文館、2004年）参照。
- 11 石黒敬章「下岡蓮杖写真鑑定術」『幕末・明治のおもしろ写真』（平凡社、1996年）所収。